

神功
皇治
韓退治圖會

~13
3914
1



門 13
3914
1

六月葦生入著

神功
皇后
三韓退治圖會

葛飾戴斗画圖

題辭

陸

天正十八年
本大出展部贈

國常垂統。神武之極。本支百世。
皇統一宗。奉若天命。奄有四國。
德懷上下。神人降王。蠢爾東夷。
逞其凶虐。王怒赫々。賜武尊命。
東夷西戎。汝矣征々。神劍呈靈。

神功皇后

陸

執訊獲砮。罪人黜伏。東夷于衰。
有蒙之吉。纘主武切。慙我六師。
脩季戎兵。似牙干城。維是鷹揚。
韓土震恐。于來于庭。並厥玄黃。
紹纘我王。季伐用張。于湯且光。
拓土三千。海外志同。伏武脩文。

寇弭羌方。強五岳。顯：今征。
乃聖乃神。民人以安。斯建寢廟。
南山之陽。南山蒼蒼。永鎮李程。
嗚呼不顯。先王不忘。
天保辛丑冬。西樞出。生題。





于後高羅大明神
 六代君仕勤功二
 百四十余年壽三
 百十六歲

武内
 宿禰

譽田皇子

神功皇后



足仲彥天皇之后氣長足
 姬尊三韓退治已後尊稱
 臣皇太后尊齡三十五歲
 之彰像

神功
 皇后



賊將
川上梟師

申刀三十三草圖卷之二

四



小碓皇子梟師退治已
后日本武尊為
十六歲尊體一丈

神皇正統記卷之二

四



賊將
熊鷹
妻

烈婦
夷守

申刀...三章圖會卷之二



年九實者
陳倫懷兒
熊阿誤也

年九養子
忠孝迺婦人
割織

神功皇后三朝圖會卷之二



英勇士
安部
久九



神功皇后三韓圖會總目錄

壹之卷

景行帝命小碓尊令伐熊襲
 小碓尊退治川上梟師
 日本武尊東夷征伐
 東夷欺日本武尊為燒討
 弟橘媛於遠洲灘入水
 日本武尊與草薙劍於宮貫緩
 日本武尊化白鳥至大倭都
 仲哀帝詔諸國令貢白鳥
 武內宿禰論妖氣知西國變
 仲哀帝熊襲退治
 神功皇后夢蒙神祇教訓

二之卷

熊襲語夷守於種姓陣沒
 檜隈安良於筑紫海濱落命
 夷守遇陳倫託阿誤
 陳倫乘扁舟遁危急
 仲哀帝於檀日宮崩御
 皇后自為神主問神祇尊号
 皇后於玉島川釣香魚
 武內命年磨令造艦艦
 安部介九遇靈魂知室鈕在處
 割織中毒酒歿非命
 武內射陳倫報主仇
 鵬送孤兒於韓土

筑前生松原來由

三之卷

安東山翠燕得孤兒

呂安道為鵬落命

新羅國王集臣下為軍議

神龍出劍裡太空中

住吉明神變演翁示詩歌

倭國軍船後順風發和珥津

大矢田宿祢敗軍

范利劍大戰倭兵

皇后投宝珠於海中慶韓兵

倭兵蒙神助再敗韓軍

新羅國王自為血戰

武內宿祢擊新羅王

四之卷

介丸於錦江擊鼉龍

阿連山儲奇計待倭兵

伊林葉備牽綴陣向倭兵

百濟王背古降皇后

高麗王晋思降皇后

翠燕吹短笛欺真鳥

皇后以弓末錄石於七字

譽田皇子御降誕

麿坂忍熊兩王叛皇后

皇后祭阿波島明神

五之卷

麿坂王狩於菟餓野落命
 豐耳招老父問所天變之發
 武内宿祢欺忍熊王
 忍熊王最期
 吉備鴨別連赴日向防熊襲
 鴨別連擊百舌雄
 鴨別連鬪熊襲
 鴨別連夜討熊襲
 群臣尊皇后称皇太后
 八幡大神御垂跡
 八幡大神御神德

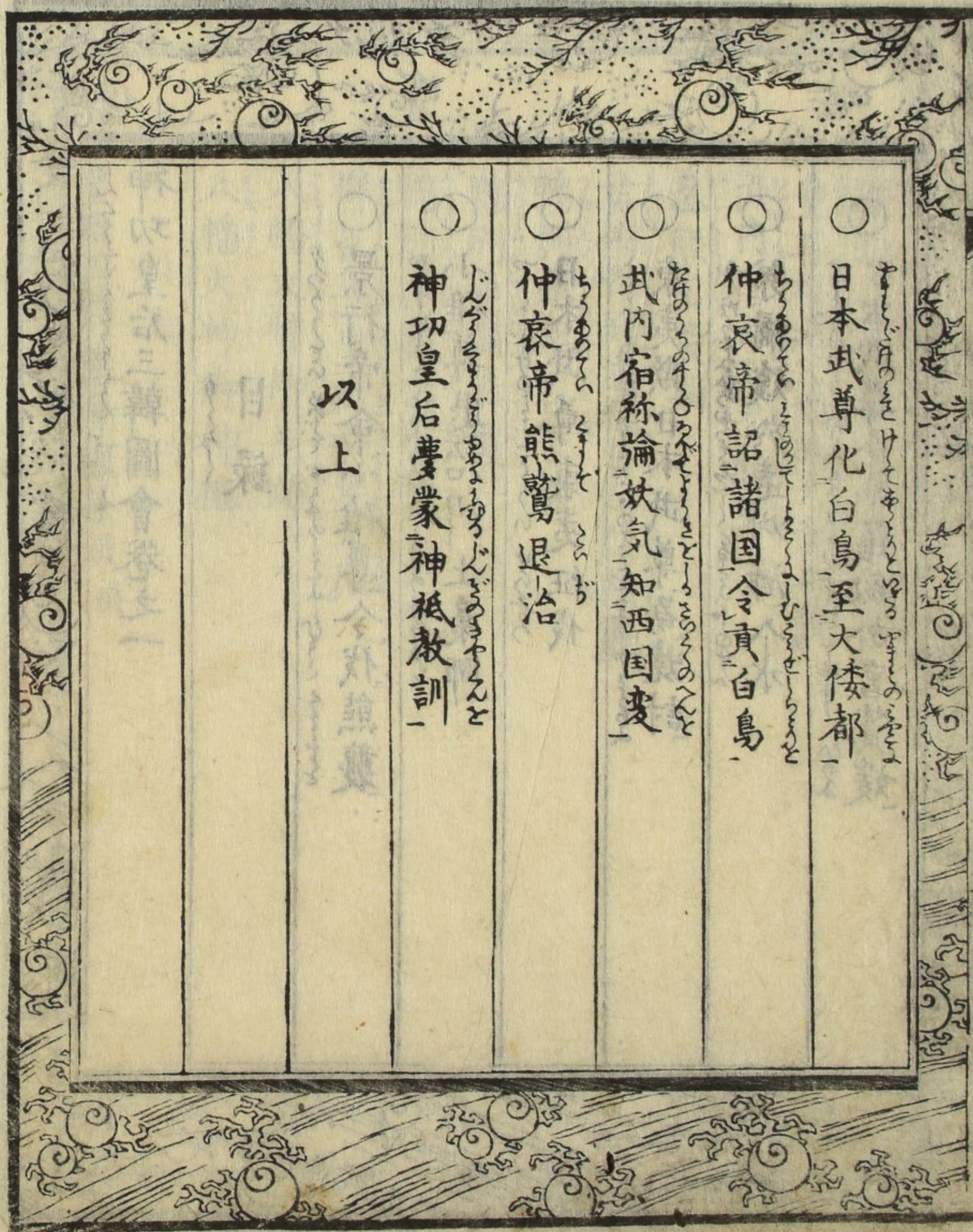
以上

神功皇后三韓圖會總目錄終

神功皇后三韓圖會卷之一

目錄

- 景行帝命小碓尊令伐熊襲
- 小碓尊退治川上梟師
- 日本武尊東夷征伐
- 東夷欺日本武尊為燒討
- 弟橘媛於遠州灘入水
- 日本武尊与草薙劍於宮篁媛



- 日本武尊化白鳥至大倭都
- 仲哀帝詔諸國令貢白鳥
- 武内宿禰論妖氣知西國變
- 仲哀帝熊鷲退治
- 神功皇后夢蒙神祇教訓

以上

神功皇后三韓圖會卷之壹



平安 山月庵主人 編述

景行帝命小碓尊令伐熊襲

異稱日本傳序曰大日本國者神靈所扶自開闢神聖出而崇尚其道神明其位拓土貽統傑於百派千流朝宗之中中華以為禮義之國質直有推風吳敗姬氏來奔秦暴徐福逃入至若任那斯盧屈膝魯侯赤帝之後莫不依歸此豈得非神道文明有仁民愛物之政哉

仲彥天皇の御后ありて以歳三十五歳して天皇は別とて天皇の御后を以て胎し高麗より征伐し直地は吾日本へと三韓を屬せしめて年々歳々彼國より八十艘の貢物を奉るるといふは是れ全く五日日本神助といひ且此皇后の功よれる所なりとて則ち神功皇后と仰溢と

白一奉とる。其功の始末を委しく尋ねる。抑人皇十二代。大足彦忍代別
 天皇ハ。景行帝。男女の皇子都て八十人在り。其の中て。小碓尊と白一
 奉。幼少き。雄略の氣貫ありて。壮年及んで。容貌美靡。一身の
 長一丈あり。能鼎を扛ふ。力あり。天皇も深く愛させり。ひ
 たり。此尊の母ハ。稲日大郎姫と白して。播磨の国より向へり。立て
 皇后とす。此皇。景行天皇の十年。春二月。孖と生せん。ひ
 し。孖ハ碓のて。胎中て重り合ひ。兄皇子と大碓皇子と名号給
 ひ。弟皇子と小碓尊と名号あり。兄大碓皇子ハ。弟皇子と名号。性質柔
 弱。孖は。唯何事も小碓尊に譲らせり。去る程。景行
 天皇十二年秋七月より。日向の国なる熊襲とて。者叛く。貢を朝せ。これ
 あり。多臣祖武諸木国。前臣の祖。菟名手。物部君祖夏花の三人とて
 是を征伐し。一旦ハ服ひ。亦二十五年秋八月。熊襲再び穴門の国の

穴門ハ。今ハ長門の國なり。此國海入にて。川上梟師。心と合。て人民を悩せり。
 穴の。景行帝深く愁ひ。則ち小碓尊ハ勇悍。父王の命。遂に熊襲は向りんとす。此度の美ハ容易の。遂に
 蒙り。速に熊襲は向りんとす。此度の美ハ容易の。遂に
 あ。射術は秀る者。召連て行んとす。世に名高き射術は。未だ
 者。或人啓て曰く。今美濃國は善射者あり。其名を弟彦公
 とす。此者と召連。とあり。小碓尊大に歎び。直地は召り。り
 弟彦公も大に歎びて。小碓尊は。偕又小碓尊武内宿禰とて。この度
 熊襲退治の軍師の役を仰付。此武内宿禰とす。素孝元帝の孫
 屋主忍男武雄。心。子。母ハ紀直。遠祖菟道彦。女影媛。といひ
 景行天皇三年。生。今年二十三歳。軍事は秀る。景行天皇の
 命。小碓尊に附屬せり。軍師の役を蒙り。然るに小碓尊ハ

餘り軍勢の多き時、及て敵を討つべし。便りありか、ついで。統率三百人、計
の軍勢あり。倭の都と進發ありせられ。先浪速へ出づ。南海道と伊豫の
國をゆく。伊豫よりして美計濃棹橋と曰く。伊豫の國と曰く。豊後の國と曰く。美計濃棹橋と
へと赴る。火の國と曰く。肥前肥後。過る。日向の國へ入る。

因ふ。美計濃棹橋と曰く。伊豫の國と曰く。豊後の國と曰く。美計濃棹橋と
神代の時、伊豫の國は最も大なる木ありしが、其木韓土す。其木
日の出る。此木より出る。如く。韓土よりして吾日本と
扶桑國と曰く。又東と曰く。文字六。木と曰く。字は日と曰く。作は
此世俗の云傳く。符會の説あり。もあはれども。更は所處を記し
む。既又此木と斬拂はる。吾日本は為る。履きて日輪と
拜む。遅く。地神五代目。鷓鴣草。菁不合尊。斬拂はる。終は火の為る
大木あり。多し。斬拂はる。火を以て焼く。終は火の為る。

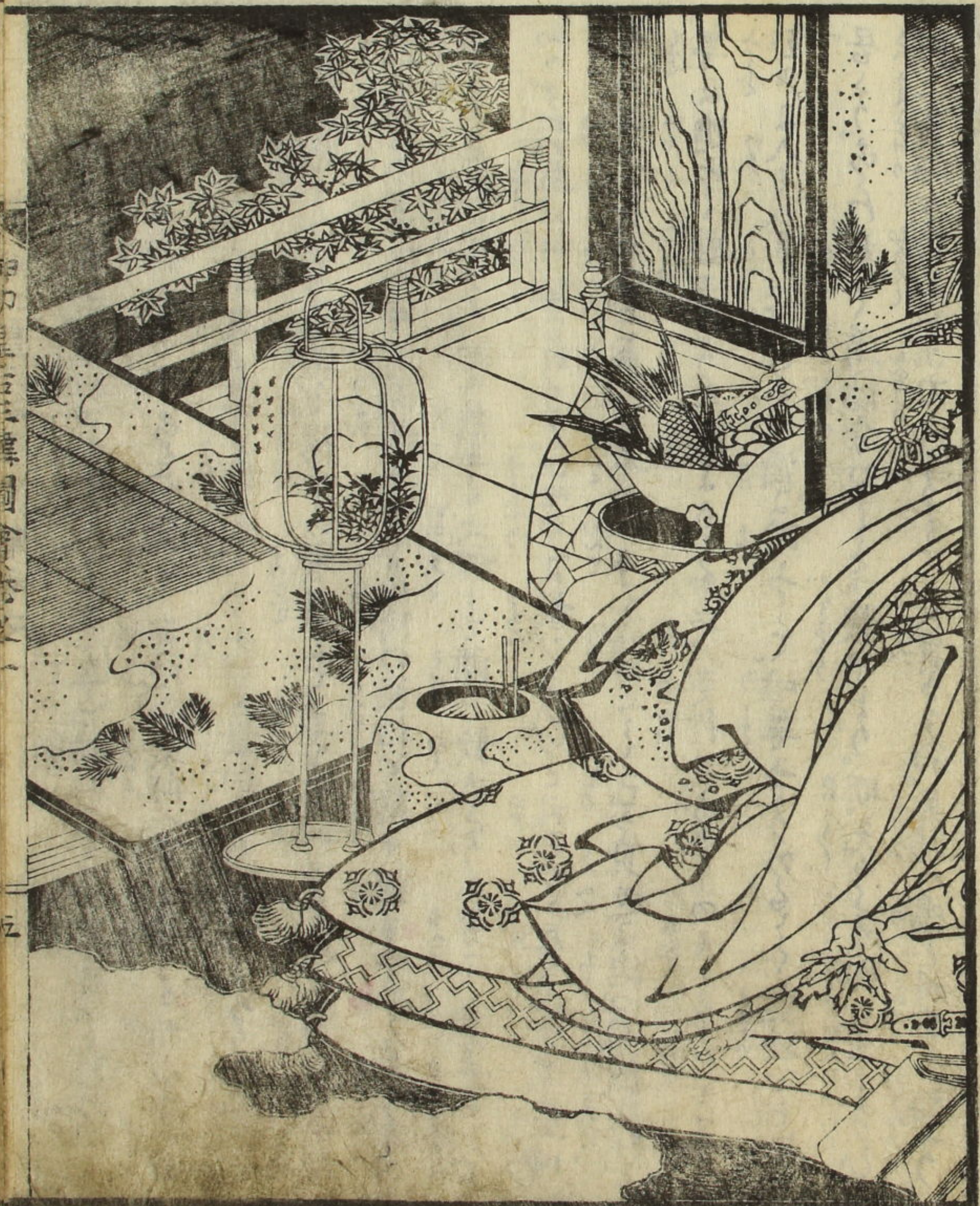
燒して。彼木豊後國へと倒れ。是と世は美計濃棹橋と喚て。伊豫
の國より豊後の國まで。彼倒れ。木の上と往來せり。今
の世も。伊豫の海辺より澳夫。海中に埋ま。扶桑木と取
得。云傳へり。

又云。韓土より吾日本の國名と唱ふる。種々あり。扶桑國と曰く。君子國と
曰く。姬氏國と曰く。耶馬臺國と曰く。倭人國と曰く。倭國と曰く。倭國と曰く。
且又我朝の神聖の名づく。所は豊葦原千五百秋之瑞穂國と曰く。秋津
洲と曰く。日本國と曰く。浦安國と曰く。細戈千足國と曰く。磯輪上秀真國と
曰く。玉牆内國と曰く。虚空見日本國と曰く。因ふ。玉牆内國と曰く。因ふ。玉牆内國と曰く。

小碓尊退治川上梟師
諸も小碓尊。軍師武内宿禰。軍勢へむけ。下知ありて。一旦熊襲を

つて陽つて逃入。熊襲勝よ来じて長追ひ見時。弟彦とてあち百人の
兵程に死物差は埋伏し居て。速く射てとるべしと。山下知ありて。やがて
二百人の軍勢を熊襲へと向らせり。尊の向らせりてと知て。
属下の者どのと俱々。ひひて其用意とあり居りし。とるれば。官軍とて
何程のとうあらん。慶幸なるべしと。勇々進んで戦つ。逃出さ官軍と頻に追うて
出まら。弟彦公と始め。百人の兵待のつけり。とるれば。弓矢を取て雨より繁
く射立らふ。その熊襲の軍勢せんくる。或は命と落し。或は深峽と
蒙りて。忽地あふ放北る。熊襲の尊へと降参す。その尊も熊襲乃
降参とゆふ。その凱歌と上て日向の国とに出ま。とるれば。是より熊襲
の二味。穴門の国なる川上。梟師が方へと向らせり。思ふる。梟師も疾
より官軍の来ると。熊襲より知らせ。とて心得て。戦の用意と十分
あり。今や遅くと俟らる。元来此川上。梟師との。者。是より熊襲が

輩ふあ。其力とて百人は當りて。一日は肉と十行つ。食する。梟師をれば
尊武内も仰る。今我梟師と忽地は亡ん。とるれば。常の者よ
あ。味方とて。損ふ。不如計略とて。速く亡ん。とるれば。梟師
梟師が陣中へ参りて。其容子と伺ふ。と。余ら。武内宿祢とらり。らり。
かく。梟師が陣中へと参り行て。其容子と伺ふ。梟師は此頃官軍の寄来
らん。と待とる。未だ何の噂も。と。皆。我。勇氣。懼。と。官軍の寄
来ら。と。怠慢の心と生。日夜美女を聚。酒宴。耽。居。と。
武内宿祢の容子と得度。と。立。尊。如此。と。白。上。奉。れ。ば。
小。尊。も。あ。と。是。より。復。武内。一層の計略。と。復。官軍
勢。皆。と。止。自。警。と。鮮。と。童女。の。女。扮。作。り。し。
劍。と。懐。と。梟師が陣中へと唯一人。と。梟師が属。下。に。過。り。し。
と。我。此。の。賤。者。の。女子。と。不幸。と。父母。と。と。り。し。



小碓尊の川上泉師と智と以て誅す

小碓尊

川上泉師

小碓尊の川上泉師と智と以て誅す

便るさやのまじらぬ。梟師の君も仕へまつ事と願はせやと出来まつ。よはは選と
 仰らるる。梟師の屬下あるを聞て。直地も梟師へ斯と告ふ折や。梟師
 の酒宴をのびく在らる。是と聞より大いび歡び。その一段のまらる。直地
 は是へ誘へ。いひるる。屬下の者畏と。尊と梟師がゆくと誘へ。其時
 尊まての美女の中は並居り。梟師の面相と熟々觀らる。まらる。鬼
 ひくさ相類み。いと悠々と大杯と酒と飲あ。小男子なる者へ入る
 あら。尊の汁略る。心の中は歡び。いと礼あ。居る。梟師
 尊の美々しく。尊のい手と推め。己が身辺は近づく。彼大杯と
 尊は進や。戯弄する。時よもや夜へ更行て。あらの女に。こがま
 臥たへ。梟師のい酒は酔う。唯尊やうの。熟睡とほ
 居る。あは。尊のい手と懐中より。明光なる。劍と出し。ひ
 川上梟師が。尾と。力ふ。突貫する。梟師の鳴と。叫び。起上る。

直地は尊のい手を取て。と止め。苦し。息と。吻と。尊は向ひ。暫時と
 あり。吾は。厭ら。一言白。上へ。あり。尊と
 あ。梟師の言葉と待ら。梟師尊は白す。尊
 へ。入。在。斯。上。名。吾。告。あり。尊
 吾。大。足。彦。天皇。の。二。男。名。小。碓。と。喚。る。日。梟師。大。い
 驚。き。る。体。亦。啓。と。吾。是。此。国。中。の。強。力。と。吾。向。は。延。後。は。い
 の。る。且。僕。是。ま。で。多。く。武。力。の。人。は。出。遇。ら。尊。の。と。智。勇。兼。備。の
 者。あ。は。残。し。僕。が。口。と。以。い。思。は。尊。は。名。と。奉。ら。ん
 こ。免。せ。ら。ん。尊。も。不。便。と。思。る。多。く。免。せ。ら。ん。梟師。此
 時。嬉。し。氣。今。以。後。亦。日。本。の。武。き。皇。子。と。稱。号。あ。と。白
 尊。と。聞。終。り。直。地。は。梟。師。の。尾。と。三。度。ま。を。刺。貫。き。於。梟。師
 と。殺。し。り。此。時。武。内。宿。禰。弟。彦。公。等。尊。の。い。身。の。上。を。思。ひ。梟。師。を。破。滅。せ。り

出来りしるが。梟師が屬下ども逃まじふとて。その計略をねりとて逃行者
と射てりしる撃てりしる。梟師の屬下ども内なる尊と引け。外ハ武内
等が勇力又出合散々と撃悩する。そのねと大將撃てて。残兵全くあし
るひ。終は悉く撃退へし。目ぞく倭へと立歸りし。父王景行天皇へこの
よしと奏しし。且梟師が白せしよしと。因えしる天皇も大の尊の功と
稱しし。つづて梟師が白せし言のどく。小碓尊の姓名も。日本武尊とて更
ませしひね

日本武尊東夷征伐

景行天皇四十年夏六月。東の夷叛く。邊境を犯す。其騷動すりとて大なる。其
是より秋七月。天皇群臣と召し。詔ある。今東夷叛て人民を略
す。やん付ぐん。忍々これ大事なり。されば誰人と以て其乱を平ぐん。
と曰ふ。羣臣皆いんも勅答する者あり。此時日本武尊奏して曰く

臣の先は西洲ある熊襲及び梟師と征伐せし。其度の東夷征伐ハ臣
が兄大碓尊が命じりし。よらんとて奏し。天皇も笑も
とて。大碓尊ハ東夷征伐と命ぜらんとし。大碓尊ハ原來柔弱ある
ハ氣質よし。はらゆ。愕然として懼む。皇居と逃出あり。山林に
隠れし。天皇大の逆鱗を。群臣も命じて速に召來らしめ
し。大碓尊と責て曰く。汝が心は欲せざる。朕豈強く汝を遣はんや。いづ
東夷も出遇ざる。其中ハ何ぞ懼む。其甚しきや。少くハ汝が弟ある。日本
武も耻づべし。大の責む。終は。大碓皇子ハ第一の皇子也。この
器量天下と治む。守者小あらむ。美濃國へと。美濃守とて
あまやられ。則ちこれ身毛津君守君。二族の始の祖とあり。いづる程ハ
日本武尊天皇に向け。兄懼く。東夷は向らせり。美濃國へと封ぜられ
まひ。今ハ臣速く東夷と平けんと奏し。天皇深く歡い。

自うろ斧鉞と取く。日本武は授け多ひ。諸宜ふやう。朕聞彼東夷ハ其性
 質甚で暴悪や。衢は適り徑小塞り。人民と苦まらむ。其東夷の中
 あり。蝦夷と喚ぶ国尤剛勇や。て男女も髪を蒙り。身と文は少くも
 禮と知らず。平素は男女交居て。父子の別あり。恩とくも報する事
 有。然とんて必ば報も。冬もまは穴小窟。夏もまは泉は住。山は登りて飛
 鳥の如く。野と行くと走獸よひ。箭と髻を藏め。刀と衣の中。佩黨類
 と聚め。邊境を犯。或ハ農桑を伺う。人民と略め。撃つれば草。隠れ。追
 とれば山は入自在と。曲者やして。往古より。以來。王化は深まる。蝦夷
 人あり。今朕汝の為人と察。小身體長大。容姿ハ端正。力ハ能鼎と扛。猛
 工ハ雷電ふひ。向ふと。勝ば。と。汝ハ汝ガ形ハ我子なれも。
 其ハ則ち神人あり。是宜ハ天朕が不徳や。國の平らう。と。怒らむ。あ
 汝と得て。汝ガ所。人とも。天下ハ汝ガ天下あり。此位ハ汝ガ位なり。願ふ

深く謀遠慮。威小勇と以。懐小徳と以。兵と煩ハせ。速ハ蝦夷人
 と平ぐべ。と宣ハ。日本武尊ハ身小あま。命を。謹て斧鉞
 と天皇より受。三度まで。戴き。東夷征伐の御用意と。とせ
 らる。時ハ天皇武内宿禰。及び吉備武彦連。太伴武日連等。ハ日本武尊ハ
 従ハ。東夷征伐の美と命。せ。三卿ハ畏。日本武尊の供。あり
 つ。都合五百余騎。の軍勢あり。冬十月壬子朔癸丑。倭の都。に追。と。と
 進。あ。と。天照太神。且。伯母君。倭姫命。小。逢。ハ
 遊。と。神風の伊勢の國へ。到。り。や。渡會郡。天照太神。不。拜。し。
 首尾。東夷征伐。都。立。歸。らん。と。願。ひ。し。伯母君。あり
 倭姫命。斎宮。居。る。ふ。面會遊。ば。れ。此。度。東夷征伐。は。赴。き。ぬ。り。と
 未。物。語。あり。と。眼。を。と。り。と。り。

思ひ多くも。更道と出た處まで。実小途方より来る人。あつたかたて
 尊唯の一人突さるる火の中より立せし心と定め。伯母君より受
 けし。蓑雲の劔と抜放さんとする。彼鞘も付く。小き囊は目
 ます。まづの手早く彼囊をひらきせらる。中より火燧の石と金と出
 是れと尊歎び多し。彼燃ゆる火は向う。自ら火と打つけ多し。不思議や
 今も火々々々。猛火忽地滅し失う。是則ち正火と以て。邪火を滅する
 所ぞ。此は武内宿禰太伴武日連を尊の足へさる。さうして此處
 へ。尋ね來つ。此形勢とる。大い小駭き。悪き鳥合の草賊と。忽地五言騎
 の軍勢小下知る。賊徒と一人も残さず。皆打取て平けぬ。則ち此日本武
 尊。益火の中。蓑雲の劔と持て立せし。世より不動尊とて。既小
 東都より目黒の不動尊とて。神門は日本武尊と記せり。さうして以て。此
 浮屠氏より不動尊と其來由大い異なり。又一説は賊徒日本武尊と焼討

んとせし。時尊の佩せるひぬる蓑雲の劔。自ら抜て燃上る草と薙拂ふ。これ
 小因る尊危急と免う。せし。故は其の劔と草薙の劔と号せりと
 且又賊徒尊と焼討んとせし。處と焼津々々と喚名せし。今唯土俗訛り
 也。津々々と唱るり

弟橋媛於遠洲灘入水

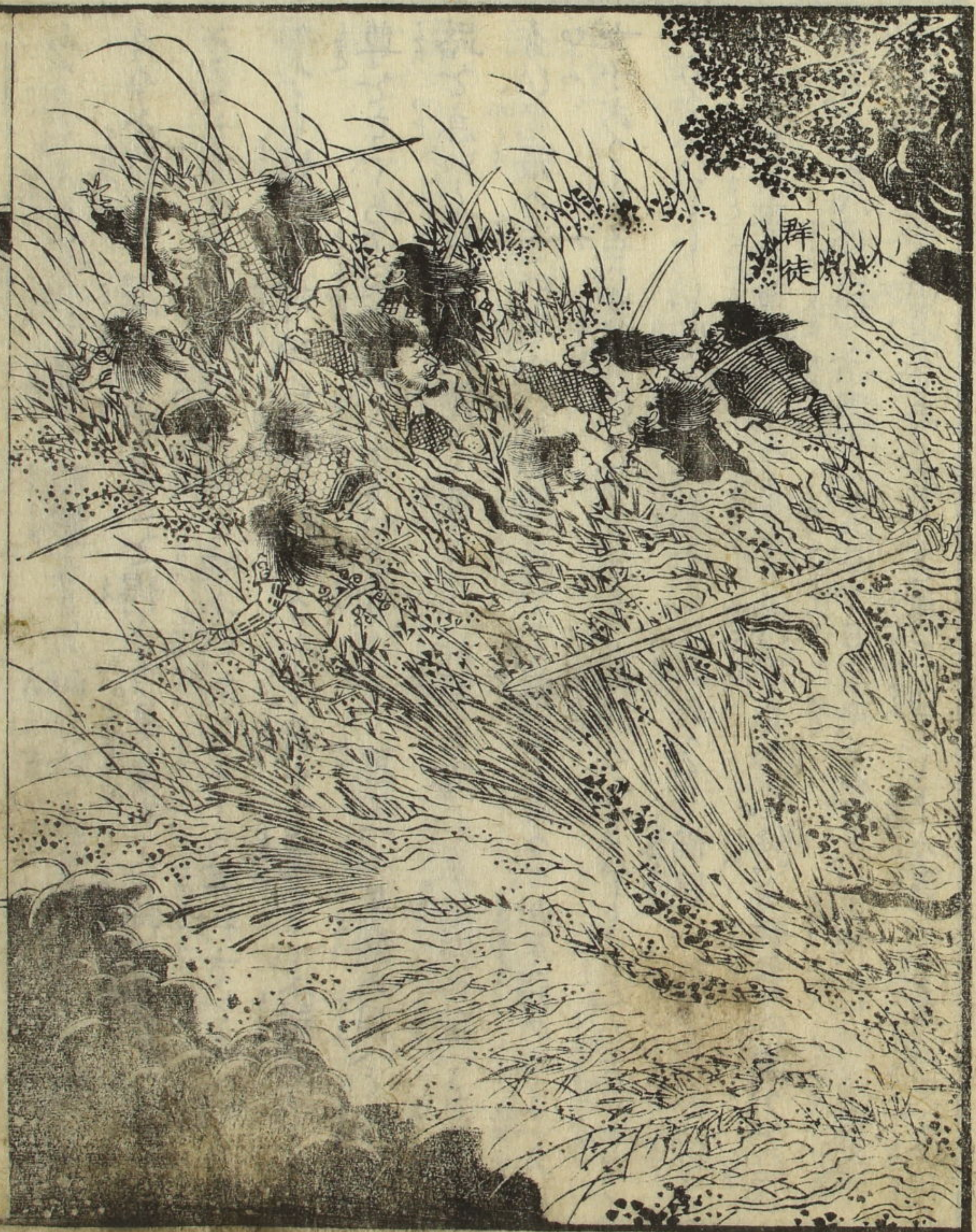
去程小日本武尊の危き處と遁まきて。首尾よく賊徒と亡し。是より
 船中をせらる。蝦夷の境までい。人と思ひ。是則ち日本第一の船
 路の難處なり。七十五里の間。遠洲灘なる。船の恙なく。あんと。皆
 祈りて有る。ふ。如何。俄は暴風吹來り。如濤あぐる。巖と碎く。船
 中。船海中。漂蕩。其危き。莫笑。風前の燈火のごとく。日本武尊大い小
 歎。我先は駿河なり。賊徒の火難。あひ辛う。とて。遁と。折
 今亦か。水難。出。是。我運命。極。所。と。歎。折

尊の従へたる妾弟橘媛とつるが船端へ立出する。妾海中入る。尊の命ふ代らんと思へ願く海の神妾が心とありきと思ひ浪風平ふとめり多とつひ終りもやい橘媛海中へひけ飛入る。尊を始ち武内あり深く駭くとつる。せんころく。唯歎して有る。やがや俄頃小風治り。平々るる青海波と巡り。玉浦と渡りて。蝦夷の境へと到り多。北時陸奥の国へ入る。葦浦と巡り。玉浦と渡りて。蝦夷の境へと到り多。北時蝦夷の賊首嶋津神。国津神といへる。兩人多くの軍勢と引率して竹の水門といへる。処に屯ち居る。遣は尊の舟の進むとて。其の威勢ふくく。の蝦夷人も深く怖と。逆し勝べると知り。弓矢と捨て降参み出尊の舟の前ふ来りて。めくも。賤し我々が目よりして君の容貌貌と視奉る。ふ実よ人倫ふ勝る。神々とナリ思ふ。斯降参と奉る。奉る。姓名とば知し。め多とあり。尊とく。吾ハ是現人神の子。

日本武といへる者あり。と仰まへ。蝦夷人等。身と戦果して。衰とけり。浪とつる。尊の舟と扶て岸へと者奉り。借平伏し。罪と免れんと。九奉る。誅とんきとも免れせむ。いづ。劔は血ぬらさば。蝦夷はひくく。治り。借尊の軍勢とみ。蝦夷より引取らけ。常陸の国と歴る。牟佐の国へと出あり。其国の秩父山へと。武具と藏め。さ。由牟佐の国と改め。後世武藏の国と号せり。牟佐の国より甲斐の国へと出あり。酒折の宮へと入せ。其折より尊築波と過。是まで幾日とる。歴ぬ。やと思し。や。あ。侍者ふ問ば。歌の上の句と案。日。理此麼利。波玖波場。頂擬氏。異玖用。加祢菟流。能。時。建。上。本。と。焚。居。一。秉。燭。の。翁。の。下。の。句。を。付。く。

神皇正統記三章圖會卷之一

二一



神刀聖石三傳圖合卷六十一

群徒



神刀聖石三傳圖合卷六十一

日本武尊

日本武尊
駿河小
賊徒
を討

うりく人々として導く形勢あり。此白狗は付まてうりく山を下り
 くるは自りく深山と出ること得たり。是全く白狗の爲るは食物
 ありも取さざると。彼白狗と喚ふ何処へ去り其行方とあらば。こ
 ちありく始めく神祇白狗と化しあり。我々と導きし疑ひありとて
 尊とちがれ同勢の人々もいと有るがごとく思ひつ。尾張の国へと志し
 路と急いで行まひぬ。斯く尊とち同勢とむく。尾張の国へと出ま
 り。尾張の守の宅へむけ。滞留せど。遊びて居る。此尾張の守一人の
 女子あり。名は宮實媛とあり。容顔のうつくしき。白玉未白り
 のあつふいと。先は遠州灘ゆく入水あり。橘媛は能く面影似ま
 せ。久日本武尊のつらと。恋々と浮石あり。終は妹脊の契りと結ひ
 たり。さしは倭の都へ還りと。五日十日と延させ。武内宿禰吉備武彦
 連等。早々都へ還りあり。と再三白し上る。尊は更なる用

ち。唯宮實媛と愛せり。思ひ月日を過す。宿も又此頃
 近江の國膳吹山に大蛇住り。人民と惱むと大く。膳吹の麓
 なる農人ども。倭の都の景行天皇へと訟へ出たり。天皇はと
 聞あり。そん容易さる。速に退治せむ。人民の禍ひ
 するべし。さうさう。朕が自りく向ふ。及び。今日本武尾張の
 國まで帰り居る。のとゆ。渠ふ命じて退治せし。是より
 直地は尾張へ向け勅使とあり。日本武尊へむけ半時もた。近江の
 膳吹の大蛇と退治す。と勅命あり。尊は慎ん。勅使の趣を受
 奉り。諸の心せり。其の準備とあり。そのひ。宮實媛尊の別
 と惜んで。いと尊とあり。是非一日と二日。其のいと仰せ
 も。尊は更なる。せん。て宮實媛。せん。還らせ
 る。まで。妻の遺物とあり。とあり。尊は。尊けふりと仰せ。

佩さるるひく。彼草薙のの劔とて我首尾よく大蛇と退治す。立歸らん日まで汝もつらうあべと宮簀媛へとてせむひ。かゝる尾張守へも暫時の別と生かす。此館とて立出るる。則ち此宮簀媛もつらも死す。草薙のの劔後は尾張の国牟婁郡。熱田明神と祭り奉らる。此の劔大蛇の尾より出たる劔とて其止るる國なりとて。尾刺とてとるへ。今改め尾張の字とせらる。既に此の劔と人皇三十九代天智天皇の御宇。新羅國の道業といへる者。我朝へと出たり。つゞいてや偷て取て。韓國へ持歸らんとせられたる。筑前の国で歸りし。俄頃雷火の為とせられ。道業は歿せり。其後所劔の尾張の國熱田へ。自ら飛歸りて在り。世に著明奇瑞あり。かゝるの劔の止りある國とせば世々武勇の人多く尾張の國より出生るといへる。又宜き事とて。

日本武尊化白鳥至大倭都

日本武尊之。近江の膳吹山へと武内宿祢吉備武彦等とてとて。りあり。大蛇へ更に見へざらば。日本武尊の心中み思ひます。偕へ我宮簀媛ふ意々。と心と蕩りあり。我といふ。此処まで出せり。人と疑ひと生じまひ。膳吹山の絶頂より。麓へとて下らんと旌せらる。いとも大いなる橋あり。其橋のうへに日本武尊とて諸軍勢打過るとり。くろく甚く滑りて恰も鮎湯の上と行ど。歩と移すと難く。さへ。あつともつらと尊と始め。諸軍怪しあり。何ぞやらん。是則ち大蛇の背あり。次第ふ動き出しぬ。尊偕へと心得まひ。大蛇の背よ。勇力ふ任し。頻り踏み。踏み切らる。日本武尊斯のど。大蛇の殺す。せむとつら。大蛇の毒氣ふ中らせ。の。熱つら。あつて。ら。諸軍尊と助け奉り。膳吹の山下。清々たる泉と汲です。免

奉り。且此泉は足とぞ冷しきなり。是より一端の熱氣醒まるといふ
 事也。後世其泉と呼べし。居醒泉と号し。今世の世に於ては醒と云ふ事
 此泉は日本武尊腰掛石といふ事
 然るに。諸も日本武尊の再び尾張へ立帰らんと思ふ。美濃の国多度山
 の麓と過りし。ふの熱氣又々發し。尾張へ出さざれば。太神宮平癒
 と祈らんと。伊勢の国へと赴き。ひしが。天の命あるを。終は伊勢の國能
 褒野といふ處あり。今石の山。歳三十歳と一世として。崩じ。ひしが。され
 武内宿禰のつら及び。吉備武彦連。太伴武日連等とて。其の御軍
 勢一同歎き悲しむ。てり。斗りき。まづ吉備武彦連と以て。尊の崩
 じ。いし。と。倭の都なる景行天皇へ。奏し。奉じ。天皇大いに駭き。ひ
 其の歎し。大に。百寮は詔して。伊勢の能褒野。厚く葬ら
 せり。時。日本武尊の陵より。一羽の白鳥立出て。大倭
 の國とて。飛行し。群臣怪し。て。櫛と開き。ひ。唯尊の御

衣の。あつ。尊骸あり。あつ。人として。彼白鳥と尋ね。大倭の琴彈の原より居たり。さうよ。此より。景行天皇へ奏聞
 白。直ち其處に陵と造らせり。其後白鳥又飛で河内の國に至
 つ。舊市の邑とて。ま。亦其處に陵と造らせり。故に此三
 箇所の陵と都て白鳥の陵と号けり。日本武尊かく白鳥と化
 去。いと。怪しむ。韓土も其例あり。蜀の望
 帝といふ。天子の死して。子鶉と化本。此故に。子鶉と
 蜀魄といひ。又蜀魄といふ。花陽國志に。是倭漢同日の訖と
 いふ。是に。景行天皇。其後とも。日本武尊の事と思ひ。給
 ず。食。味と甘。寐。枕と安。晝夜不
 喉咽。天氣甚。我子日本武。昔年熊襲及び島師が。後
 き。時。未。及。速。是。征伐。西洲。後ハ

常不朕が左右不在。朕が不及と補け。其後又東夷の騷動あり。是は
討しむる人あり。愛と忍ん。賊境に入しむ。朕一日も日本武
がてと思はざる日なき。朝夕還らん時と俟たず。思ひきや俄頃も幸せ
と。嗚呼是非もなき。以後誰人と與ふ天下と治人と。
大い不歎じ。此歳や。是景行天皇四十三年の事ありき。

仲哀帝詔諸国令貢白鳥

時不景行天皇の日本武尊の位を禪らんと。思ひ。其後五十三年の
日本武尊の崩じ。ひらく。第四の皇子あり。推足彦尊と
以て。五十一年秋八月己酉朔壬子。皇太子とせしむ。其後五十三年の
秋八月。天皇羣臣に宣く。朕日本武と忍ぶ。猶止。月増年。ふり
けり。切き。さふ。日本武。生前ふ平げ。処の国々を巡狩せん。と
思入。と詔あ。群臣一統か。て。け白く上。天皇の

鷹與ふ乗じ。まづ伊勢の国へ。行幸あり。夫より東国を巡狩し。て。
復も伊勢の国へ。還御あり。伊勢ま。止。是と綺の
是より。又も近江の国。行幸あり。志賀ふ。居。三歳。是と高穴穗
宮。と。奉。既。六十年。冬十一月乙酉朔辛卯。天皇此宮
あ。崩御あり。時。歳。百六歳。は。は。は。
皇太子。雅足彦尊の位。即。人皇十三代。の天皇と仰。は。
此。天皇。ふ。聖君。ふ。事。在位。九年。
よ。絶。事。四十八年。春三月庚辰朔。足仲彦尊
と立。皇太子と。遊。は。
則ち。是。日本武尊。第二の皇子。あ。御母。入。道。入。姫。命。と。白。
活目。入。彦。五十。挾。第。天皇。の。帝。女。あり。雅足彦。天皇。男子。あ。
ま。加。旃。日本武尊。の。天。が。下。勇。猛。勳。功。ま。せ。世。と。早。

まひふりて。帝位は即ちをば。先帝景行天皇ふも深く。
 ませふて。此尊とて。天嗣とす。斯て六十年。夏六月。
 月己卯。雅足彦天皇一百七歳。崩御。多々尊。
 大倭の国。狭城。盾列。陵。葬。奉。偕皇太子。足仲彦尊。十四代。天皇。
 の位。あ。即。多。仲哀帝。其明年の春正月。氣長足姫尊と立。皇后。
 とす。神功皇后。皇后。推日本根子彦太日。天皇。
 開化。曾孫。氣長宿祢王の女。母。葛城の高額姫と白。幼。
 聡明。叡智。貌相。又。壯。麗。是。先。天皇。叔父。君。彦。入。大。兄。女。大。
 中。姫。と。娶。り。多。ひ。て。麿坂。忍。熊。と。す。兩。人。の。皇。子。と。生。ぜ。る。此。兩。
 皇子。其。性。甚。多。邪。僻。又。次。小。未。熊。田。の。造。等。少。祖。大。酒。主。の。女。と。娶。り。
 屋別皇子と生ぜる。其時更。大伴武。以。大連。武内宿祢。並。て。
 政。と。行。り。後。世。左。右。の。大。臣。と。い。て。興。り。武。内。の。此。時。也。

一百七歳。及。び。つ。己。小。景。行。天。皇。五。十。一。年。小。棟。梁。の。臣。と。り。成。務。天。
 皇。三。年。大。臣。と。昇。り。斯。仲。哀。帝。在。位。元。年。の。冬。十。一。月。群。臣。
 詔。して。宣。ふ。や。う。み。朕。未。だ。弱。冠。み。つ。て。父。王。
 甚。だ。父。王。と。慕。し。思。へ。り。父。王。の。尊。骸。と。能。褒。野。の。陵。に。葬。り。后。
 神。靈。白。鳥。と。化。し。て。棺。槨。と。出。く。高。く。天。に。翔。り。多。ひ。し。され。ば。白。鳥。と。
 獲。く。是。と。養。人。と。思。へ。り。と。曰。ふ。諸。国。は。此。と。詔。り。あ。つ。く。
 白。鳥。と。奉。ら。し。め。り。越。の。国。の。者。白。鳥。と。二。番。得。て。是。と。貢。ら。ん。と。
 都。と。上。り。菟。道。の。川。に。過。る。頃。仲。哀。帝。と。異。母。の。弟。君。蒲。見。
 別。王。と。い。ふ。方。彼。白。鳥。と。見。何。の。処。へ。持。去。ぞ。と。曰。ふ。越。の。人。答。へ。
 く。天。皇。父。君。と。戀。あ。つ。養。押。ん。と。い。ふ。白。鳥。と。僕。等。越。の。国。の。
 と。貢。り。所。り。と。い。ふ。浦。見。別。王。加。羅。々。々。と。打。笑。ひ。白。鳥。
 焼。バ。則。ち。黒。鳥。と。り。強。は。是。と。奪。り。去。る。

あつて越の人せんうさく都へ上りて仲哀天皇へ此趣と訟るる事也。
天皇大いふ蒲見別王の先の王は無禮と惡く直地は兵卒と遣はして
蒲見別王と誅し置る。此時の人曰く父は是天なり。兄は亦君なり。其
天と慢く君は違ひる。豈誅と免ることを得んやといふ。實みく
宜る言どう

武内宿祢論妖氣知西国変

偕も其後天皇仰せらるるに遠き国より白鳥を送り亦蒲見別の
如き惡人ありて奪るるに白鳥居処あり。直地は奏せよ。
朕自らうつとんと仰るるに此を諸国へと觸らうと云ふ。越
の国角鹿といふ處より。白鳥下しといふことを奏し置る。天皇
直地は皇后始め百寮と召連らる。角鹿は行幸はし。茲は行宮と
興ておぼふはす。是と筭飯の宮とも云ふ。且又此処の地名と

角鹿といふ人皇十代崇神天皇の御宇。額鹿の如き角あり人
の舟に乗じて越の国なる筭飯の浦は泊る。或人何の国の人なる
と尋る。彼者對えり。吾は吾の大韓国の王の子也。名は都怒我と
いふものなり。日本は聖の皇ありと聞。出来たりといふ。此後都
怒我吾日本は三年が間とほらる。故に越の筭飯と角鹿といふ。
さると後世訛りて。敦賀といひ又文字のゆゑ角鹿ともよび置る。
是は偕おさ。又紀伊の国徳勒津といふ處より。今此所と。白鳥下るは
と奏せらる。天皇大いふ歡び置る。皇后さる。百寮は角鹿は止
めありせられ。自ら武内宿祢と二人三人の卿大夫も。官人數百と
俱して紀伊の国徳勒津にうつせり。亦徳勒津の宮といふ。興
興つは。一日天皇高樓に登り四方を商む。遙々西の方ふ
當つ。異なる赤雲霞々として立集る。大は駭く。是は是

只事はあらず。俄頃群臣と口して詔する。朕苟くも天に代て極と
立万民と撫育せんと思へども。不徳にして四夷八荒未だ不服然る。今
高樓に登り西の方を眺望し赤雲黓黓と其妖祥奈何せん各
つまびき其志と述べし。と宜ふ群臣あはれと聞とひく。口と揃えて
君の寔は父君の武勇と受継ぐふ而已。聖徳微妙くしてせまひくその
仁天の如く其智神の如く。至徳禽獸も及ぶといへん。然るに五月の風
枝と鳴る。十日の雨塊と破らふ。民哺と含み。腹鼓とうち。喜遊と
只天下の泰山の如く。四夷八荒も招むして自ら服ひん。天時の妖祥は
時の泰否にあづかす。殊に赤雲ハあはれと究めく。愛くは吉瑞ふこと
へ。と奏し。白と武内宿禰眉と聳め。群臣の辨其理をふしも
あられど。然らば臣も此程より粗彼西の方へ黓黓赤雲と視て心
中易かす。彼赤雲ハ雲不似くとも雲不あらば又烟はあらず

霧ふあはれ。是所謂妖氣するん。と奏す。天皇大に驚く。然らば汝其
審るを説と。武内謹んづつ。臣熟く考ふる。此氣ハ地上溼熱の蒸
起る蒙々たる烟霧の氣ふあらば。凡氣の内赤く外黄ふして潤澤目と
耀まもの。幾する処の地王者の起るとあらば。定めて王者の遊ん
其地不行とある。又城門樓閣華蓋龍馬等の形とあり。黄雲紫霧の
間不隠る。或ハ彩色森々として天子衝くもの。是皆帝王の氣なり。
龍の如く。獸の如く。火炎の如く。旌旗の如く。弓弩の如く。凡の皆猛將
の氣なり。埃の如く。火光の如く。劍戟の如く。森木の如く。彩雲の天小
連るが如き。是皆軍勝の氣なり。馬肝の如く。灰の如く。隗山の如く。
捲席の如く。偃蓋の如く。猪羊の如く。群鳥の乱飛するが如く。乍ち
起り乍ち没。乍ち聚り乍ち不散。塵の勃々するが如く。霧の始て
起るが如く。者ハ皆敗微の氣なり。此の蔓の連結するが如く。須臾ふ

日本武尊
膽山
大蛇
退治す



罷で。又出或ハ四方ノ雲ヲ。獨リ赤氣あつて。旌旗の如く。虎の如く豹の如く。白虹の如く。曲釣の如きハ皆暴兵の氣也。渾々たる青氣鬃鬃たる樓臺の如く。赤氣の中ハ衝く。紛々たる黒雲相連つて。圍と作が如く。彩色の中ハ藏る。此皆伏兵の氣也。或ハ猛獸の如く。羅鼓の如く。箕箒の如く。破軍聚營の如き者ハ皆伏兵の氣也。又常々大雲五色其上ハ出るとあり。其下必ハ賢人ハ隠る。とあり。地ハ祥氣あり。上ハ微あり。青雲紫霧龍文高彩とあり。其下必ハ聖賢英傑の誕生あり。地ハ凶氣あれば。則ち上ハ蒸て。風霾早魁。雷雨地震。とあり。其下必ハ饑饉兵戈横出まるとあり。凡海辺の蜃氣ハ樓臺と象り。廣野の氣宮闕と作也。戦場の地。寶玉の塵。及皆光氣あり。此皆其下の氣也。微と上ハ發する。と今觀所の赤氣ハ其形獸の如く。火燄の如く。陰々層々として。殺

氣と含め。是正しく。西海の方不當つて。謀叛の黨あり。前表る。と覺え。然ハ思ふ。各の異見承り。一座と估と刀。すハ皆武内ハ高論と問。感伏。耳と教る。の。更ハ口と聞く者ハる。り。る。

仲哀帝熊襲退治

其時遙々末坐より。一人進み出て。大臣の異見。一点違ひ。今筑紫ハ羽白の熊襲と。つる者殺さ。日向の国ハ亦復熊襲殺す。先ハこれ熊襲。三。代。不服黨と。塞と構へ。諸国。貢物と奪ひ。倉廩。數年の糧と貯え。純ら武術と調練。其黨亦強勇。や。難。早く討手と。向。由。大事。及。者あり。天皇。群臣。其。人。是。安部。高。九。と。茲。天皇。高。九。と。近。熊襲。殺。數々

神工皇三章 國命 卷之三
るをい。父王日本武尊の武徳ふよづく。川上梟師とひく討平けし
後ハ権く其沙汰も閔ざりし。今亦熊襲の叛き不服制へ筑紫の國不
於て羽白熊鷲諸國よりの貢物を奪ふとい。奈何るてと。汝其審ら
るると知らば。疾く語るべしと宜ふ高丸謹んぞつらら。作麼此度
の熊襲ハ先の熊襲とハ其勇十陪ふしてさし。川上梟師ハ草ふ
あはば。且又筑紫の羽白熊鷲といふも。容易さるる曲者して色黒く
身の丈高く。膂力飽ま。強く。智謀又深かり。或ハ其母夢中ハ形ち
熊の如く。白き翼ある神人來りて交りて見ん。胎むと有て生る所
さし。依て彼中華の太公望の飛熊不準へ自う呼ぶ。羽白熊
鷲と号はと。思ふよハ愚民と惑はと。誣言さるる。然あは後ハ草鹿
文逆鹿支など各一人當千の兵と始め。百千余りの同類と後へ郡縣と
畧め財宝と奪ひ。遠近より美目麗女とさへ。ハ人の妻娘の差別

あり掠奪して己が小星とす者。既ハ百個に及ぶと閔り。又其楯籠は
山と不知火嶽といふ要害堅固うして容易攻む。願くハ臣弟介丸と共
み先鋒とさし。道ある仕るべし。いと勇ま。閔ゆるハ天皇斜
めさ。打飲さるる。則ち安部高丸介丸と先鋒として自う兵を
率く。德勒津の宮と進發あり。兵船數百艘と海に泛く。まづハ穴
門の國へと赴う。さし。いぬ
神功皇后夢蒙神祇教訓
斯く仲哀天皇ハ角鹿さる。皇后が許へ。武内宿祢と勅使して遣し
さし。事の様子と審る。告ありて。穴門國へむけ來り。さし。と知ら
し。めさ。ハ皇后と閔る。一度ハ駭き。一度ハ飲む。武内宿祢
との供。召連ら。角鹿の筈飯と立せ。直地は浪速へと出さ。せ
さし。此地は於く熊襲さ。ハ羽白熊鷲と首尾よく天皇退治

申の百三十三章 國命 卷之三

あまのつら。皇后自うら。大小の神祇へ禳ごて上るるふあど。後此
処とていひぐ濱とよびさや。今つら。つら。皇后ハ座摩住吉の
両社との勸請あそびさよ。今住吉明神ハ表筒男中筒男底筒男の三神ハ
急ぐもひぬるが。折しも順風あつ。船あつ。速は進もるる。浪
浪速々々と曰ふよ。浪速とて地名ハあつ。起ま。やど安藝
国停田の水門ま。い。六月十日ま。海鯨魚多
く。舟の傍ふよ。あつ。皇后是とつ。と。覚あり。
の坐右ハあり。酒と灑きける。海鯨魚とて飲酒氣り
酔て浮く上る。あつ。海人多く取て。是亦聖王の賜なり。と。
歡ぶてかぎり。此故とて。今の世中。此処の海鯨魚ハ例年
六月十日ハ酒ハ酔が如く。傾浮む是とる。停田の浮鯛とて

り。今停田と。斯て皇后穴門の国へ。ま。舟よりあつ。上り
野次と。跡部磯那とて。海に干珠満珠とて。宝珠とて
顆持き。皇后ハ奉りて。此二顆の珠ハ。と。此
ま。御代あつ。君なる方。納める。有る。宝珠ハ
して。治乱あつ。か。治世ハあり。晴雨と王
り。乱世ハあり。所謂水攻ハ用ひて。水の漲離自由。干珠ハ日とて
。又水と涸。満珠ハ雨と降。又水と陪。此道理とて。必ハ心ハ納め
る。皇后大ハ。感。実ハ。宝珠とて。不
測。得。あ。嬉。汝ハ功一方。ず。て。磯那とて。賞
ま。二顆の宝珠と納め。小高き。坐と。今。此。我ハ手
と。干珠島と。我右手と。満珠島と。呼べ。磯那の功と。嶋の名
小。と。立。せ。七月ハ豊浦の津

申の皇正三皇年圖會の六十一

ちて仲哀天皇子會し多ふ。天皇の飲び大くさる。かく同日九月
あのかは宮室を興す。是と穴門の豊浦の宮と名づけ。純ら熊鷹討討
の軍議をぞり。あひぬ。かく。程は同八年春正月。天皇筑紫へむけ。進
發ありんと。皇后もむく。豊浦の宮と出立ありしが。岡の縣主の祖熊鷹
とのり者。鳳船ののり。とりの度と聞て。賢木の枝は白銅の鏡。十握の
劔。八尺の瓊の三室とつけ。周芳の沙歴の浦。よむ。奉り。彼三寶。成
天皇ふ献じ。奏して白く。臣敢て此三品と奉る。所以八尺瓊と以。曲
妙。あぞ。所代。あり。白銅鏡と以。分明。山川と看行。十握劔と
以。天下と平げ。え。と。白く。天皇大い。賞美。い。ひ。彼三室と納
ありぬ。是より熊鷹。船路の導とつ。す。ふ。船岡の浦。入。ま。に
あり。水門。い。ろ。く。進。む。と。得。ざる。人。々。こ。こ。と。駭。き。て。あ。り。聞。不
泰り。熊鷹。が。悪。心。の。ある。者。ふ。それ。と。天皇。連。る。あ。り。か。は。怖

孽やあらん。と。天皇。宣。ふ。中。朕。聞。熊。鷹。ハ。明。心。あ。つ。く。泰。き。ま。れ
り。何。ぞ。汝。等。が。め。つ。を。知。の。下。く。さ。る。ん。や。さ。ら。る。が。一。應。熊。鷹。と。糾。さ
る。中。と。て。や。く。熊。鷹。ふ。汝。倘。身。罪。あ。り。く。其。咎。を。斯。此。船。の。進。ま。ぬ。度
あ。ぞ。事。あ。ら。う。ふ。め。つ。を。と。の。尋。ね。ぬ。熊。鷹。と。つ。か。い。あ。ま。り。云
恐。入。し。勅。命。さ。り。此。舟。の。進。は。る。ハ。全。く。臣。が。罪。ま。あ。ら。ん。抑。此。舟。の。進
は。る。所。以。ハ。昔。時。此。浦。の。口。に。多。くの。蘆。鱉。く。生。て。り。し。が。其。中。ハ。二。本。の
蘆。尤。尺。長。く。三。丈。あ。ま。り。し。り。く。其。二。本。の。蘆。化。し。て。男神。女神。と。さ。り
て。其。後。此。岡。の。浦。と。過。る。者。必。に。彼。二。本。の。蘆。の。神。と。祭。ら。ら。う。と。見。入。崇
あ。り。と。云。傳。ふ。と。早。く。此。神。と。祭。ら。せ。る。と。奏。し。り。あ。ふ。あ。り。く
天皇。伊。賀。彦。と。い。ふ。者。と。祝。者。と。す。り。て。祭。ら。し。め。ら。る。船。頭。は。進。む。度
と。得。つ。天皇。始。め。皇后。の。飲。び。斜。め。る。が。終。り。筑。紫。ふ。つ。り。は。り。て。又。も
此。地。ハ。宮。室。と。興。ふ。と。筑。紫。の。檀。日。の。宮。と。号。け。り。一。夜。皇后。の。夢。を。ふ

神代卷 三十一 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十

神人三個四個頭なるは声齊一告るるは今日天皇熊襲
 熊襲の不服と憂い多し何ぞや。熊襲熊襲ハ是内国の者なり。豈
 兵とあげて伐み足んや。伐ども自うら服人不如西北の方より當つ
 室の国あり。譬バ美女の睨の如き向津国あり。日本は向ふ 眼の炎く金銀
 多し其国小あり。是と析余新羅国といふ連は彼国を得るべしと抑告
 あつて夢覚ぬるは皇后より見ゆひし。此とて天皇は告げあふ
 天皇のいとも怪し見ゆひしとて。多疑ひ多し心あり。自うら高麗岳
 登つて。遙し西北の方と望み見ゆひし。更し小国と覺しと知しんぞれバ
 天皇仰せらるるは朕西北の方と望みんるは海あつて国なり。豈大虚は国
 あるとあふんや。と宣ふ。此とて一点も信じらるるは。假皇后の
 夢し。神人告て曰く。天津水影の如く。抑伏し我所見の国と何ぞ国
 ありと天皇は宣ふ。我告奉る所と誹謗して信じらるるは強ち熊

襲及び熊襲と伐らるるは天皇俄頃痛くする所あつて。崩じらるる
 既し今皇后は天皇の胤と胎しはせり。慎まざらばあふんは天皇此
 らへも我言と信ぜざる時ハ。唯胎りする所の胤産し出
 らせらるる。室の国を獲らるるは夢にさあつて。皇后はつら
 小あひる。亦も此とて天皇は告せらるる。天皇は更し用ひらるる。
 とハ皇后の心の迷ひあり。此頃熊襲さるるは熊襲のこのころひるる
 事ハ。かろさるるは凡るる人。決して心よかけらるるは勿とて。その
 翌の日直地ハ熊襲と征伐の用意ありて。軍勢とあつちあり。不知
 火が嶽へと向らせらるる。此時ハ臨人ハ皇后ハ天皇の鎧の袖よりさるる。
 夢の告もあるものなり。是非よりさるるは。涙とあつちとあふん也。
 天皇更ら閑入るるも。了らるるは。檀日の宮をぞ進發する。此時ハ是八年秋九月
 廿日の事なる

因ゆゑふゆゑふゆゑてて忽たちににずすべべ事ことははああららばば漢かんのの藝ぎ文ぶん志し小せう曰いくくののよよみみののりりとと非ひどどああららももままのの代しろ小せう其その占うらなのの官くわんああらら。詩しもも友とものの夏なつととののまま。大おほ人ひとのの占うらなとと明あきららふふとと以もつてて吉きち凶きゆうとと考かんがへへとととと



神功皇后二轉圖會二一一

